

秋田大学教育文化学部研究紀要
人文・社会科学第75集別刷 令和2年3月

ランドスケープ概念の再検討のために
—— 人びとと環境とのかかかわりとランドスケープ ——

和 泉 浩

For Reconsidering the Concept of Landscape

IZUMI, Hiroshi

ランドスケープ概念の再検討のために

—— 人びとと環境とのかかわりとランドスケープ ——

和 泉 浩

For Reconsidering the Concept of Landscape

IZUMI, Hiroshi

Abstract

The purpose of this paper is to reconsider the concept of landscape in order to find a clue to clarify the relationships and standpoints of various perspectives on landscape that make the term extraordinary confusing and fascinating. Relatively recent discussions on landscape tend to stress movement, motion, becoming and bodily experiences, and refuse its visual aspect based on its etymology: 'scape' is not related to 'scope'. This paper examines the discussions of Tim Ingold 'The Temporality of the Landscape' (1993), Paul Rodaway, *Sensuous Geography* (1994), and Kenneth R. Olwig 'Recovering the Substantive Nature of Landscape' (1996). All of them are published in 1990s, but influential or important in subsequent discussions and considerations on landscape. Rodaway's definition of landscape stresses its visual aspect, Olwig's etymological and historical study of landscape insists on its relations to community, custom, political and cultural identity, and Ingold deconstructs landscape focused on its temporality. This paper argues the visual aspect of landscape is worth to reconsider, and to discern various multiple paths and relationships between person and environment, definition of landscape focused on visual aspect is indispensable, and to identify environment as environment, detached, reflexive stance and experience are necessary. Landscape can be conceived as a way of detachment or experiences of detachment based on the visual.

Key Words : Landscape, Environment, Taskscape, Tim Ingold, Kenneth Olwig

ランドスケープは質的で異種混雑的である。ティム・インゴルド

ランドスケープは外観のうちでもっとも固いものであり、そのなかで歴史はみずからを明らかにすることができる。それは背景でも舞台でもない。フレッド・イングリシ

私たちが身につけている着物のように、景観はその内側や裏側にある多くのものを覆い隠すだけでなく、それを表現している。エドワード・レルフ

1. はじめに

諸感覚についての人文社会科学での研究の興隆とともに、サウンドスケープやスメルスケープ、テイストスケープ、ハプティックスケープなど感覚にかかわるさまざまなスケープについて論じられるようになってきている。それら以外にも、ボディスケープやメディアスケープ、イデオスケープ、シテイスケープなど多くのスケープについて論じられるようになっており、「私は、増やしていくという流行、つまり可能なあらゆるスケープを増やして

いく流行を嘆かわしく思う」(Ingold 2007a: 10) という指摘すらなされる状況になっている。

こうしたさまざまなスケープについての視点や議論の源になっているのは「ランドスケープ」の概念であり、「ランドスケープ」の概念がさまざまな対象へと応用され続けている。それでは、「ランドスケープ」とはいったい何か。このことについて検討することが、さまざまなスケープを扱ううえでも不可欠である⁽¹⁾。そこで本稿では、「ランドスケープ」の概念について検討を行う。

2010年の著作のなかでのことではあるが、カール・ベネディクトソンは、「最近ルネサンスのようなものを経験してもいるランドスケープ研究……」(Benediktsson and Lund 2010: 174)と、ランドスケープについての研究が当時、ふたたび活発になっている状況について指摘しており、ランドスケープに関する研究は膨大な数に及ぶ。このため、本研究で取りあげて検討することのできるランドスケープの概念は、ランドスケープについての研究のごく一部分にすぎず、したがって本稿は、ランド

スケープ概念の再検討そのものというより、再検討に資する素材の一つになることを目的とする。

ランドスケープとは何か、といった問いで問題になるのは言うまでもなく、その定義である。しかし、ランドスケープはその定義づけが困難な用語である。たとえば、1979年のドナルド・ウィリアム・マイニング編の *An Interpretation of Ordinary Landscape* の「イントロダクション」のはじめには「ランドスケープは、魅力的で、重要であり、あいまいな用語である」(Meining 1979: 1) という言葉がかかげられている。このマイニングの指摘以降も、本稿でもそのいくつかを取りあげるように、さまざまな論者によってランドスケープ概念の再検討がなされ、またランドスケープに関する著作のなかでその語の定義がなされてきた。しかし、こんにちでも、カトリン・ルンドとベネディクトソンが「ランドスケープは研究にとって魅力的な主題であると同時に明確に定義することが人を寄せつけないほど困難である」(Benediktsson and Lund 2010: 1) と指摘するように、定義がきわめて難しい用語でもあり、その定義はマイニングの時代よりもさらに混迷した状況にある。

その一方で、はじめに触れたように、さまざまな対象への「スケープ」の応用と拡大がなされ続けている。このため、さまざまな対象へのスケープの応用は誤った理解にもとづくもの、という指摘も容易に行うことができるが、しかし誤っていない理解を提示することも難しい。また定義があいまいなため、さまざまな研究や活動、計画などにランドスケープという用語が用いられるようになっている(この点、サウンドスケープも同様である)。

それでは、なぜランドスケープの定義はいちじるしく困難になっているのか。本稿ではその理由のいくつかを示していくが、理由はそれほど複雑ではない。ランドスケープの語の起源と歴史についてどのような立場をとるのか、主体(主観)と客体(客観)、精神と身体の二元論についてどのような立場をとるのか、ランドスケープと視覚、見ることと見られることとの関係をどのようにとらえるのか。定義の難しさは、この立場をめぐる考え方の違いに起因していると考えられる。定義において特定の立場をとった場合、他の立場からの批判がつねに可能であるとともに、特定の立場をとることによってとらえ損ねる面が存在してしまう。冒頭にあげた引用でレルフはランドスケープを服にたとえているが、場や人によって適した服があり、それでも見る人によってはそれをどう思うか異なる、といったような状況がランドスケープにも生じ、したがって定義が困難になる。本稿ではこうした状況の一端を明らかにしていく。

はじめに、ポール・ロダウェイの整理を中心に、基本をなすともいえるランドスケープ概念について検討し、

次にケネス・オルヴィグによるランドスケープの語源と歴史についての議論を取りあげ、そしてランドスケープのこんにちの議論に大きな影響を与えているティム・インゴルドのランドスケープの議論について検討する⁽²⁾。

ランドスケープという語の訳語として「風景」や「景観」があるが、景観とした場合、風景画や風景写真との関連が見えにくくなるため、ランドスケープという表現を使用する⁽³⁾。景観の「観」には、見ることや見た目という意味があり、この視覚との関連がランドスケープの概念で問題になっていることの一つである。風景は、山水など自然を想起させ、対象が限定される傾向にある点が問題だが、「風」が含まれるという点はインゴルドの考え方と親和的な面もある。

2. ロダウェイによるランドスケープ概念の検討

ポール・ロダウェイは *Sensuous Geography: Body, Sense and Place* (1994年)のなかで、諸感覚、触覚や聴覚、視覚と地理との関連について考察しているが、視覚について扱った「視覚地理学」の章で「ランドスケープ」の概念について検討している。

ロダウェイははじめにさまざまな論者によるランドスケープの定義をあげているが、そうした定義はランドスケープについて考えていくために重要であるため、そこであげられている定義を以下に訳しておく(Rodaway 1994: 127-8)⁽⁴⁾。

ランドスケープは、人間の活動の舞台全体のある種の背景幕(backcloth)である。(Appleton 1975: 2)

17世紀から使われるようになった用語としての「ランドスケープ」は、精神の構成物であると同時に、物理的で計測可能な実体である。(Tuan 1979: 6)

風景とは一つの文化的イメージである。周辺環境を再現し、構成し、象徴する、絵画的な手法のことである。(Cosgrove 1984:1) [Cosgrove and Danieles 1988 = 2001: 11]⁽⁵⁾

ランドスケープについて考えるとき、私たちはほとんどいつも視覚的構築物に関心を持っている。(Porteous 1990: 4)

景観〔ランドスケープ〕は単に生活の美的な背景ではなく、むしろ文化的な態度と活動とを表現したそれを規定するものである。そして景観の大きな変化は、社会的態度の大きな変化なしにはあり得ない……それゆえ景観には、私たちがそれをなぜどのよ

うに知ったのかということから生じる「意味」が常に染み込んでいる。(Relph 1987: 122 = 2013: 252-3)

耕作されている (working) 田舎がランドスケープになることはほとんどない。ランドスケープという考え方じたい、分離と観察を必然的に伴っている。(Williams 1973: 120)

……自然にたいする集合的な労働と闘争が、自然および世界と人間との出会いの唯一の舞台であることが終わると、自然じたいも生活の出来事への生きている参加者であることをやめる。このため、自然は全体として「行為のための場」、その背景 (backdrop) になる。つまりそれはランドスケープに変わり、メタファーと比較に断片化され、個人的で私的な営為と冒険を純化する (sublimate) ことに奉仕するようになるが、それはいかなる意味でも自然じたいに現実的あるいは内在的なやり方で結びついたものではない。(Bakhtin 1986: 217)

ランドスケープは社会的、文化的生産物であり、土地にももの見方 (a way of seeing) が投影されたものであり、それ自身の技術と構成のための形態を持っている。それは制約を与えるもの見方であり、私たちと自然との関わりの経験の他の様態 (alternative modes) を減らす。(Cosgrove 1984: 269)

ランドスケープは、その住人たちの生活のための場というよりむしろ、その人たちの闘争や達成、思いがけない出来事とその背後で生じるカーテンのように思われることもある。(Berger 1972: 13, 15)

ランドスケープは、特定の立場から眺められる眺望 (a prospect) を意味するようになった。(Tuan 1974: 133)

ランドスケープは、私が屋外にいるときに見て、感じることのすべてである……ランドスケープは、私の日々の営為とともに私の生活のより風変わりな状況に不可欠のコンテキストであり背景である。(Relph 1981: 26)

ランドスケープは、魅力的で、重要であり、あいまいな用語である。(Meining 1979: 3)

ロダウェイはこれらの定義からランドスケープという語に結びつけられている 9つの意味を以下のようにまとめている。

- 1 舞台、空間または場面
- 2 人びとと環境との関係
- 3 視覚的表象
- 4 実体あるいは全体を含意する
- 5 ものの見方、技術
- 6 物理的な背景、しかし……
- 7 その形態は社会的態度を反映している
- 8 観察者と対象との分離を含意している、そして
- 9 日々の闘争の現実の幻影、カーテン、または隠れ蓑

(Rodaway 1994: 129)

ロダウェイは、以下でみる語源についての検討も行ったうえではあるが、ランドスケープを次のようにとらえている。「……ランドスケープという用語は、環境の経験を、現実または想像された土地や領域、場面の個々の部分にし、物質的または美学的な、そうした土地や領域、場面とのある種の間接的な関係を確立する視覚地理学を与える」(Rodaway 1994: 130-1)。またロダウェイはランドスケープを「社会的 - 歴史的構築物」としたうえで、その視覚的な面を重視する。「ランドスケープは、人と環境との出会いにおける視覚的なものの重要性と、文化的実践が視覚的なものをどのように定義するのかを明確にする」(Rodaway 1994: 127)。

ランドスケープは景観や風景という訳語からもわかるように、一般的に、見た目や視覚にかかわるものと考えられているが、ランドスケープは必ずしも視覚と結びついたものではない。というのも、ランドスケープの「スケープ」は視覚と関連があるわけではないからである。「私たちの知覚に関わる視覚 (scopic) と『スケープ (scapes)』との間の一見明らかに見える語源的な親族関係は偽物であるにもかかわらず……一般的には結びつきがあるとみなされている」(Ingold 2007a: 10)。スケープは語源的に視覚とかかわるものではないにもかかわらず、ランドスケープは視覚的なものとみなされる。ここに、ランドスケープ概念の混乱と対立の原因の一つ、そしてその最も大きな原因と考えられるものが存在する。

たとえば、欧州評議会 (Council of Europe) の 2000 年の「ヨーロッパ・ランドスケープ (欧州景観) 協定」(European Landscape Convention) では、ランドスケープは次のように定義されている⁽⁶⁾。「“ランドスケープ”は、人びとによって知覚された、ある領域を意味し、その特徴は自然的要因と (または) 人的要因の作用と相互

作用の結果である」(Council of Europe 2000)。

協定という国際的かつ社会的に広く用いられるものの定義においても、ランドスケープは「知覚された」(perceived)とされており、視覚とのかかわりが定義に入っていない。

それではなぜ、ランドスケープは視覚(だけ)とかわるものではないのか。次にこの点についてランドスケープの語源に関する議論、特にロダウェイとケネス・オルヴィグの議論をもとに見ていく。

3. ランドスケープの語源と用語の歴史

ランドスケープの語源については、より古い意味である土地と人びとのかかわりと、より新しい意味であり、風景画とかかわる美学的な意味とに分けられることが多い。ロダウェイは、それぞれの意味について次のように説明している⁽⁷⁾。

第一に、land/scapeという用語の語源に隠され、landshapとlandskriftに関連し、おそらくもとの用語である物質的な用語がある。これは、封土や部族のテリトリーなど、領域(area)の単位を意味する。この「-scape」は、friendshipとkinshipと同じ接尾辞「-ship」に遡ることができ、存在の状態(state of being)を意味している(Relph 1981: 26)。したがって、このことは、耕作され(worked)、土地やテリトリーの特定の部分にたいして確立された関係にある集団や個人によって所有される、領域の物質的な単位(material unit of area)が、ランドスケープという用語の根本をなす意味であることを示している。(Rodaway 1994: 129-30)

ランドスケープの「根本をなす意味」は、特に視覚と関連するわけではない。しかし、次の歴史的な展開のなかでランドスケープと視覚が結びつくようになる。

第二に、より広く認められているのは美学的な用語である……これは、15世紀はじめのフランドルとイタリアで生じ、19世紀後半まで西洋の芸術の伝統として広く受け入れられ、こんにちでは写真に引き継がれている風景画と一般的に結びつけられた芸術の技法を意味している……もっともリアリスティックな風景画でさえ、視覚的印象を高めるためにその場面を修正(modify)しており、実際に視覚的に経験された空間を正確に再現することはほとんどない。この視覚的表象の基礎は線遠近法の技術である……。 (Rodaway 1994: 130)

ランドスケープの語源と歴史的展開については、ケネス・オルヴィグ(Olwig 1996)が詳細な検討を行っている。オルヴィグは、そうした検討を通して混乱したランドスケープ概念の「実質的な(substantive)意味」を明らかにしようとしている。特に、ランドスケープについての美学的アプローチは「歴史的な内容を無視する……一面に偏って」(Olwig 1996: 631)おり、ランドスケープ概念の混乱の多くは「歴史的かつ地理的なコンテキストのなかで、人の居住(habitation)と環境との相互作用の場の一つとしてランドスケープの実質的な意味を再検討することによって取り除くことができる」(Olwig 1996: 630)⁽⁸⁾とオルヴィグは述べている。

オルヴィグは、デンマーク語のlandskaberやドイツ語のLandschaftやLand、英語のcountyやcountry、natureなどの語を検討しているが、ランドスケープの語源にかかわるドイツ語のLandschaftの「接尾辞shaftと英語のshipは同源であり、『creation, creature, constitution, condition』を意味する……」(Olwig 1996: 633)と指摘している。さらにLandは「慣習法、その法を具体化する諸制度、法の制定と執行に参加する権利を与えられた人びとの結びつきが、LandschaftでのLandの根幹をなす意味にとって根本的に重要である」(Olwig 1996: 633)。またデンマーク語の「landskabはたんなる領域(region)ではなく、法と文化的アイデンティティの焦点の一つであった」(Olwig 1996: 633)。

このように、ランドスケープはもともと、ある地域での人びとの生活とその生活のなかでの慣習と慣習法を指すものであった。しかし、それが風景画の登場によってその視覚的な面が際立ってくるようになる。この背景についてオルヴィグは、16世紀ヨーロッパ北部で風景画が生み出された歴史的、社会的背景について指摘している。「この時期、ローマ・カトリック教会の普遍主義だけでなく、教会がヨーロッパ北部の社会に導入しようとした成文化されたローマ法の普遍主義にたいするオルタナティブが求められた時代であった」(Olwig 1996: 633-4)。

「普遍主義」の侵攻にたいして、地域独自のものに目が向けられるようになった(これは、グローバル化が進むこんにちの状況とも重なる)。「風景画は、〔成文化されていない〕慣習法が……Landschaftの物質的構成(fabric)のなかに刻み込まれ、記憶されているということ私たちに思い出させるものであった」(Olwig 1996: 633)。

地域の日々の実践のなかで継承されてきたものが、成文化された権力によって危機にさらされたとき、それを視覚的に表現し、留めておく方法として風景画が誕生し、人びとの人気を博すことにもなった。「ヨーロッパ北部の風景画という主題は明らかに語全体の意味での

Landschaft だった。それは『美しい自然の景色』以上のものだった。それには、当時の主要な政治的、法的、文化的な諸問題の核心をなしていた、その土地の慣習によって刻みこまれた意味が染み込んでいた」(Olwig 1996: 633-4)。

このように、ランドスケープという語の語源と歴史的な変化をたどることによって、オルヴィグは、ランドスケープと地域コミュニティ、場所とのかかわり、その地域の政治的・社会的代表とのかかわり、慣習と慣習法とのかかわりを示し、ランドスケープがたんなる視覚的なもの、美学的なもの（絵画のジャンルの一つにすぎないもの）ではなく、「個人的アイデンティティ、政治的アイデンティティ、そして場所のアイデンティティにとってきわめて重要な意味」(Olwig 1996: 631) を持つことを強調している。「……ランドスケープは、テリトリーか景色として存在するものと理解される必要はなく、コミュニティ、正義、自然と環境の公正 (equity) の焦点……としてとらえることができる」(Olwig 1996: 630-1)。これがオルヴィグの考える、ランドスケープの「実質的な」意味である。

こうした語源についての検討は重要であり、そこから多くの視点を導くことができる。しかし、こうした議論において次の点を考える必要がある。なぜ「より古い」用法が正統なものとなさなければならないのか。「スケープ」と「スコープ」が「一般的には結びつきがあるとみなされている」、より新しい時代の用法をもとにすることは、なぜ誤ったものとされなければならないのか。

オルヴィグの研究は、もともとの意味でのその土地の慣習と結びついた「実質的な」ランドスケープが、その視覚的表象と歴史的に結びついていく過程、風景画としてのランドスケープが当時の社会的状況と結びついた近代 (モダニティ) にかかわる展開であることも明らかにしている⁽⁹⁾。そして、そこにはランドスケープと客観化と抽象化、権力との関わりという問題が存在している。

4. ランドスケープと離れること

ロダウェイは、「ランドスケープ概念の芸術的な使用は、世界にたいするある種の関係、つまり距離を置いた (detached) 観察者の眼を伴ったものである」(Rodaway 1994: 130) と指摘している。オルヴィグの研究によって明らかになることは、「芸術的な使用」が必ずしも「芸術」ととどまるものではない、ということである。ランドスケープについてしばしば区別される、美学的な意味と、人びとと土地とのかかわりにかかわる意味は歴史的に結びついたものであり、さらに、ランドスケープについて考えるうえで、人びとと土地、場所とのかかわり方の変化も考慮に入れる必要がある。そうした変化によって、

風景画という形でランドスケープが視覚的に記憶に留められる手法が発展したからである。

ロダウェイは、西洋での人と世界との関係の変化（「抽象化の増大」）とともに、ランドスケープにかかわる距離を置いた観察者の視点と権力との関係について指摘している。これは、見るもの（主体）と見られるもの（対象）との関係についてしばしば指摘されてきた点である。「ランドスケープという用語の展開は、西洋文化での人と世界との関係の抽象化の増大と、見る人（特権的視点と、視界を構成する権力を持つ）と（見られる）対象だけでなく……芸術家や専門家（たとえば建築家、地理学者）と他の観察者（または消費者）の間のある種の権力関係の確立を伴っている」(Rodaway 1994: 131)。

デニス・コズグロブもオルヴィグの議論にもとづき、次のように指摘している。「……ローカル化された……強い自己-規制的な農村コミュニティ……〔それにたいして〕より距離をとった規制的な体制、特に国民国家の登場とともに、ランドスケープは生きられる経験ではなく、より絵画的なものになった」(DeLue and Elkins 2008: 93)。

ある土地での日々の仕事と生活のなかからは、そのなかで実践されている慣習を「慣習」として取り出す必要はそれほどないだろう。つまり慣習を慣習として取り出すためには、それから距離をとり（「リフレクシヴ」な視点に立ち）、何らかの状態に（変化のある特定の時点、そして特定の人たちにとっての視点に）固定化する必要がある。そして、そのとき、当然のことながら「すべて」が取り上げられるわけではないし、そうすることができるわけでもない。ロダウェイがあげているレイモンド・ウィリアムズの「耕作されている (working) 田舎がランドスケープになることはほとんどない。ランドスケープという考え方は、分離と観察を必然的に伴っている」(Williams 1973: 120) という指摘は、風景画など「芸術的な使用」のみにあてはまるものではない。

こうしたランドスケープにおける「分離と観察」、離れるという契機は、人びとの移動によっても生じ、また高まる。少し後の時代のことを思い描いての指摘だと考えられるが、デヴィッド・ワンバーク (David Wamberg) は次のように述べている。「……自然にたいする仕事 (duties) から自由な視点は特に都市的なものであり、都市居住者が田舎を訪れ、そこに自然にたいする自らの産業的搾取の埋め合わせを求めたときに喚起される」(DeLue and Elkins 2008: 95)。

ランドスケープには、自然とのつながりの変化、自然にたいする人と社会の変化、自然から離れることも含意されている（この点についての言及は、上のロダウェイによるミハイル・バフチンの引用にも見られる）。

オルヴィグによれば、ランドスケープの「スケープ」と語源が同じとされる英語の ship には、「creation」、創り出すという意味もあるが、この創り出すこと、形づくることとランドスケープとのかかわりについてアン・ホイストン・スパーン (Anne Whiston Spirn) は次のように述べている。「ランドスケープはつねに形づくること (shaping) にかかわっている。それは、手や道具、機械を使った直接的なものだけでなく、法や公共政策、資本の投下と留保 (withholding)、何百、何千マイルも離れたところでなされた他の行為によっても形づくられる。ランドスケープを形づくる過程は時間と空間のさまざまなスケールで働いている」(DeLue and Elkins 2008: 93)。

こうしたさまざまなスケールでの働きは、時代や社会によって異なるが、ランドスケープの語源の時代にも存在していたことだろう。つまり、ランドスケープの「実質的な」意味における離れること、離れたところとの関係を考え直してみる必要がある。

次に、こんにちのランドスケープに関する議論に大きな影響を与えているティム・インゴルドの1993年の論文「ランドスケープの時間性」(The Temporality of the Landscape) について検討する。

5. インゴルドのタスクスケープとランドスケープ

「ランドスケープの時間性」(1993) で、インゴルドは「第一に、人間の生活は過程であり、時間の経過を伴っている。第二に、時間の経過は、そこで人びとが生活するランドスケープの形成過程でもある」とし、「考古学と人類学の視点を一致」させようとする。

ランドスケープの「時間性」に焦点をあてるのは、そのことによって、上述のランドスケープについてよく行われている区別を乗り越えるためでもある。

ランドスケープの時間性に焦点をあてることを通して……人間の活動にとって中立的で、外部にある背景としてのランドスケープという自然主義的な視点と、それぞれのランドスケープを特定の認知的あるいは象徴的な空間の秩序づけとみなす文化主義的な視点との不毛な対立を乗り越えることのできる可能性があると考えている。これら2つの視点に代って、私が「住まうことの視点」(dwelling perspective) と呼ぶものを採用すべきと論じるが、その視点でのランドスケープは、そこに住み、そこに自らの何ものかを残してきた過去の世代の生活と仕事の持続的な記録 (enduring record)、そして証言として構成される。(Ingold 1993: 152)

時間性に焦点をあてた「住まうことの視点」からのラ

ンドスケープについて説明するために、インゴルドはランドスケープが「それではないもの」から説明する。ランドスケープが「それではないもの」とは、「土地」、「自然」、「空間」の3つである。「ランドスケープは『土地』(land) ではなく、『自然』ではなく、『空間』ではない」(Ingold 1993: 153)。インゴルドは、なぜランドスケープは土地、自然、空間でないと考えたのか。

インゴルドは土地と空間を量的で均質的なものとみなしている。それにたいして、「ランドスケープは質的で異種混濁的である」(Ingold 1993: 154)。ランドスケープについて、「どのように」について聞くことはできるが、「どれくらいか」と聞くことはできない。つまり量で測ることができず、質的である。また「ランドスケープにおいて、AとBという2つの場所の間の距離は、なされた旅 (journey)、ある場所から他の場所への身体的な移動、そして道とともにしだいに変化する眺め (vistas) として経験される」(Ingold 1993: 154)。それにたいして「潜在的なあらゆる旅がプロットされるボードが空間に相当する」(Ingold 1993: 155)。これはアンリ・ベルクソンの「持続」と「空間」の区別にも重なる。

『ライズ』のなかで、ランドスケープという言葉を用いてはいないが、インゴルドは次のように主張している。

私たちが自分の道を進むにつれて、さまざまなものが視界に入り込みまた視界から出てゆき、新しい眺望が開けるとともに他の眺望が消える……私たちが周囲の環境についてもつ知は、環境のなかを私たちが移動する行路そのもののなかで、場所から場所への推移とその道筋に沿って変化する展望をもとにつくりだされる……何よりも徒歩旅行を行うことで人間は世界に住むのだ、と私は主張してきた。(Ingold 2007 = 2014: 142-3)

インゴルドがランドスケープを「自然」ではないとするのは、次のような理由からである。「私は内的世界と外的世界との区別を拒否する。ランドスケープは、精神の眼で調べられる、想像における像 (picture) ではなく、かといって、人間の秩序を課せられることを待っている異質で形のない物体 (substance) でもない……ランドスケープのなかで生活することによって、私たちがその一部分になるとともにランドスケープは私たちの一部分になる」(Ingold 1993: 154)。つまりランドスケープは自然/人間という二項対立での自然の側に位置するものではない、ということである⁽¹⁰⁾。

このような「そうではないもの」の検討を通してもたらされるランドスケープの「積極的な特徴づけ」は次の

ようなものだとインゴルドは述べている。「要するに、ランドスケープとは、そこに住み (dwell), そのさまざまな場所に暮らし (inhabit), その場所の間をつなぐ道にそって旅する人たちに知られたものとしての世界である」(Ingold 1993: 156)。これは上記の引用での「私たちが周囲の環境についてもつ知」と一致する。このため、「ランドスケープと環境の区別をつけることはたしかに難しい」(Ingold 1993: 156) ことにもなる。

インゴルドは、環境を「機能」(function) からとらえられるものであるのたいして、ランドスケープは「形態」(form) にかかわるとする。「……身体概念が生物の機能ではなく形態を強調するのとちょうど同じように、ランドスケープの概念は形態を強調する。有機体と環境のように、身体とランドスケープは相補的な用語である」(Ingold 1993: 156)。

この身体とランドスケープとの関わりのなかから出されるのがインゴルドの「タスクスケープ」の概念である。「特殊性を奪われた人の仕事」であり、量的で均質な「労働」にたいするものが「タスク」である。「どのように仕事という実践をその具体的な特殊性においてとらえられるだろうか。このために私は『タスク』という用語を用いるが、『タスク』は通常の生活の営みの一つとして、ある環境での熟練した行為者によって実施される実践的な活動 (operation) と定義される。言いかえるとタスクは住まうことを構成する行為である」(Ingold 1993: 158)。そしてインゴルドは、「私は、相互に結合したタスクのまとまり (ensemble) 全体をタスクスケープという概念でとらえる……タスクスケープの時間性は本質的に社会的である」(Ingold 1993: 158-9)。

インゴルドは土地とランドスケープ、労働とタスクスケープそれぞれの関係が、「価値」(交換価値) と「使用価値」の関係と同じとしているが、それでは、ランドスケープとタスクスケープはどのような関係にあるのだろうか。

インゴルドは「ランドスケープはタスクスケープが凝固した形態」, 「具現化された (embodied) 形態でのタスクスケープ」と述べている⁽¹¹⁾。そのうえで、インゴルドは凝固したランドスケープを「時間性」によって溶かしていく。「タスクスケープを構成する活動には終わりが無いため、ランドスケープが完成することはない。それは『作り終えられる』(built) ことも『解体される』(unbuilt) こともなく、つねに作り上げられている途中である……ランドスケープはその性格からつねに『work in progress』になる」(Ingold 1993: 162)。さらに、「あらゆるものが動きのなかで漂っている……受動的で外部から働きかけなければ変わることのないランドスケープの固定された形態として見えるものも、それじたい動き

のなかにある……」(Ingold 1993: 164)。

ここに至り、「……ランドスケープの根本的な時間性を認識することによってはじめて、タスクスケープとランドスケープの二元論を排除することができる」(Ingold 1993: 164) というように、ランドスケープとタスクスケープの区別が解体 (脱構築) される。これが、インゴルドの「住まうことの視点」である。「世界に住まうことは、世界に働きかけることや、世界を大きく変えることを意味するのではなく、世界とともに動くことを意味する。私たちの行為は世界を変えるのではなく、行為は、それじたい変容している世界の本質をなす部分である」(Ingold 1993: 164)。

ランドスケープとタスクスケープの区別は解体され (またその過程でランドスケープの人工的構成要素と自然的構成要素との区別も解体され), 「動き」(movement, motion), 「生成の過程」(process of becoming) が残される。

インゴルドは天気とランドスケープとの関係について検討した論文でも、その関係をジェームズ・J・ギブソンの「媒質」と「面」との関係としたうえで、物質と面を中心にした認識の転換の必要性を主張している。

生 (life) を出来上がった (ready-made) 世界の無生命の (inanimate) 面の上で展開するものとして想像する存在論……ランドスケープはそうした存在論では舞台装置のようなものとして現われる……私はこの存在論を逆さまにすることを提案する。占有者ではなく居住者 (inhabitants) として、すでに形づくられた面を横断するのではなく、生成のなかの世界 (world-in-becoming) を通って進む生き物を想像してみよう。そうすると、それらが通って移動する媒質の特徴がきわめて重要になる。住まわれる (inhabited) 世界は、ランドスケープの堅実な (grounded) 固定性によってではなく、第一に天気という大気の流動性によって構成される……物についての視覚が光の経験に覆われるように、形成のなかにある世界 (world-in-formation) の生成的な流れとして感じられる天気によってランドスケープは飲み込まれる。(Ingold 2005: 103)

こんにち、視覚中心主義への批判の流れなどのなかで、インゴルドと同じく (議論の詳細については論者によって違いはあるが)、身体的な経験や感覚、動きを重視したランドスケープの考え方もさまざまな論者によって主張されている。

6. おわりに——ランドスケープと視覚

インゴルドのように、ランドスケープの時間性によってランドスケープの概念を解体できるのは、固定化したランドスケープの概念がある程度確立しているからであり、あらゆるものが動きと生成、変化の過程にあるということは、忘れられがちになることもあるとはいえ、ある意味では当然のことであり、そこからどのように、また何を取り出すのが重要だろう。定義にもよるが、「住まうこと」にもそうした働きが不可欠ではないだろうか。

ランドスケープの概念が（人間中心主義という批判も可能ではあるが）人と環境とのかかわりに関するものであることは、語源とその変化の歴史から見てもある程度共通の見解として認めることができる⁽¹²⁾。それでは、人と環境とのどのようなかかわりか。ここからさまざまな議論が分かれる。しかし、本稿で見たように、人と環境とのかかわりをそうしたものとして取り出すとき、そこから「離れる」という視点が必要になる。ランドスケープの議論において、実践や体験、身体への「近さ」が本来的なもののように説明されることもあるが、そうしたもののなかに埋没しては見えないこともある。「離れる」ことによって人と環境の区別自体もなされる。それでは、ランドスケープの概念によって、この「離れる」ことのどのような方法あるいは面に焦点が当てられるのか。

ランドスケープの経験にはさまざまな感覚、身体がかかわる。少し動けばランドスケープも変化する。歩いてもそうだし、階段を上っても、木に登っても、エスカレーターやエレベーター、自転車や自動車、ロープウェイなどを使ってもランドスケープは変化する。絵画や写真だけでなく、画面を通してさまざまなランドスケープを見ることが出来る。歩くことだけがランドスケープの経験ではない。ランドスケープには天気だけでなく屋内外の照明や建物なども影響を与える。そのときどきの関心や気分、体調なども影響を与える。

この箇所のランドスケープという用語の使い方は特定の用法にもとづいたものになっている（この点はインゴルドなどの議論でもそうである）。こうした特定の用法とは何か。それは人と環境とのかかわり、環境から人が離れることにおける視覚的な次元である。視覚的次元がランドスケープの日常的な用法にも、視覚的な把握に批判的な議論においてもそっと入り込んでいる。こうした点を意識する必要があるだろうし、また無視するわけにもいかないだろう。

人と環境とのかかわりには多様かつ多元的な経路や方法が存在する。そして、それは相互にかかわりあっており、その相互のかかわりについて考えることは重要であるが、さまざまなかかわりを区別することなく、そのま

ま取り出し、把握することはできない（区別されない状態が人の経験の基盤になっているとしても）。そして、人と環境とのかかわり、環境から離れて環境をとらえるうえで、「聴覚」に焦点をあてた取り出し方がサウンドスケープであり、「視覚」に焦点をあてた取り出し方がランドスケープであり、その取り出し方（感覚の区分にもとづくものだけではない）にしたがって、さまざまなスケープが考えられることになる。

視覚に焦点をあてるからといって、ランドスケープ、そしてその視覚（まなざし）を作りあげている社会的、歴史的、文化的関係を取りあげることができないわけではないし、焦点を明確にするからこそ、さまざまな関係を明確にすることもできる。ランドスケープはカーテンやヴェールのようにさまざまなものを隠し、見えなくする（イデオロギーとしての）働きもあるが、何をどのように、なぜ隠しているのかについては、そのカーテン自体を明確にすることによって明らかにすることができるものだろう。また、たとえば、ランドスケープについての立場や社会的位置などによる見方の相違ということも、さまざまな感覚が関連する、質的で異種混濁的な状況のみでは見えてこないのではないだろうか。

さまざまなスケープを考えると、ランドスケープが概念的な源になることによって、視覚に関連する考え方が他のスケープにも入り込む傾向が生じる。さまざまなスケープについても文章やデータ、写真や図などを用いて視覚的に表現する必要があることも多い。こうした視覚中心の表現によるとらえ方の限界や問題について考えていくことは必要ではあるが、視覚的なものを否定すべきものと単純にみなすこともできないだろう。

これもしばしば指摘されているが、ランドスケープを人と土地（land）とのかかわりとした場合、ランドスケープの概念と「場所」の概念との区別についても考える必要が生じる。

エドワード・ケーシーは場所との関連を欠いた近代的主体について次のように指摘している。「場所と自己の関係は相互的影響関係にとどまらず……より根本的に共-構成的なもの（coingredience）である。つまり、それぞれ他方の存在に不可欠なものである……自己なしの場所はなく、場所なしの自己もない」（Casey 2001: 684）。こうした場所との関係を「ランドスケープ」という概念でとらえることが妥当なのか。

たとえば、ランドスケープを文化として受け継ぐ、守る、それが生活の質にかかわるといったとき、特に環境あるいは場所や土地の何に焦点が当てられるのか、またあてる必要があるのか。さまざまなスケープが関連するとはいえ、焦点化が無意味というわけでもないだろう。

本稿は、ランドスケープに関する1990年代を中心と

した重要な議論のいくつかを検討しただけであり、まだ検討すべき議論が多く残されている。したがって、暫定的な定義ではあるが、以上の本稿での検討を通したランドスケープの定義は、ロダウェイの定義と類似したものではあるが、次のようになる。ランドスケープとは、視覚的な面に焦点をあてた人と環境とのかかわり。

【注】

- (1) 別稿(和泉浩 2018; 2019)で「サウンドスケープ」の概念について検討したが、そのなかで「ランドスケープ」概念について十分な検討ができなかった。本稿はその検討の試みの一つである。
- (2) インゴルドのランドスケープ(と時間性)についての議論は多くの文献で参照されている(Bender, Barbara, 2002; DeLue, Rachael Ziady and James Elkins eds., 2008; Benediktsson and Lund eds., 2010 など)。インゴルドはサウンドスケープについての議論にも大きな影響を及ぼしている(和泉 2018; 2019)。
- (3) 本稿で既存の邦訳を利用したものについては、「景観」という表現を使用した箇所もある。
- (4) 以下の一部ものは既存の邦訳を利用した。
- (5) ロダウェイはこの引用をコスグロブの1984年の *Social Formation and Symbolic Landscape* からとしているが、1988年の *The Iconography of Landscape* の誤りである。1984年のコスグロブの著作では次のようにランドスケープについて説明されている。「本書での主張は次のとおりである。ランドスケープは、西洋人の一部が自分たちの周囲の世界とそれとの関係について、自分たち自身と他者にたいして表象し、それをとおして社会関係について述べてきたやり方、ものの見方(way of seeing)を表わしている」(Cosgrove 1984: 1)。ランドスケープについて議論では、この説明もよく取り上げられるものの一つになっている。
- (6) この協定では、「ランドスケープは、あらゆるところの人にとって生活の質の重要な部分をなしている」、「ランドスケープは個人と社会の幸福(well-being)の重要な要素であり、その保護と経営、計画には、それぞれの人の権利と責任が伴う」などといったようにランドスケープが位置づけられている(Council of Europe 2000)。ランドスケープ概念の検討については、こうした面も考慮する必要がある。
- (7) ロダウェイは3つ目の意味として、自然地理学や地誌学で使われ、人文地理学者によって取り入れられ、また変えられていった、「よりあいまいにはあるが、地理学的な用語」があるとしている(Rodaway 1994: 130)。
- (8) オルヴィグは「実質的ということによって、『外見ではなくリアル』であることと、『ものの実質に属することだけでなく、法的な意味での『権利と義務を創出し、定義する』ことを意味する」(Olwig 1996: 645)と述べている。
- (9) 本稿では紙幅の関係で取り上げることができないが、オルヴィグはランドスケープのイギリスでの展開につい

でも検討している。

- (10) フレッド・イングリリスも次のように論じている。「ランドスケープを理解しようとするなら、それを対象としてとらえることはできない。ランドスケープは人間をつくり、また人間によってつくられる。ランドスケープは人間の行為の基礎(土地 ground)であり条件である……ランドスケープについて何かを語る場合、それを生産した実践を考える必要がある。物事の形成過程(making)は同時に、それがどのようにとらえられ、解釈されるかの定義でもある」(Inglis 1977: 489-90)。
- (11) ここでの議論で、インゴルドはG.H. ミードの「折りたたまれた行為」(collapsed act)の議論を参照している。「G.H. ミードはそれぞれの対象を『折りたたまれた行為』とみなされるべきと論じたが、そうだとすれば、全体としてのランドスケープも同様に、具現化された形態でのタスクスケープとして理解されなければならない。つまり、諸活動のある類型が一連の特徴に折りたたまれる」(Ingold 1993: 162)。またインゴルドはタスクスケープを音楽に、ランドスケープを絵画にもたとえている(Ingold 1993: 161)。
- (12) ランドスケープ研究で著名なバーバラ・ベンダーは「……人びと、すべての人びと、がその周囲の物質的世界を理解し、それとかがわる方法……」(Bender and Winer eds., 2001: 3)と説明しているが、ランドスケープに人や生きものなどがいてはいけないのだろうか。このため本稿では「環境」とする。「環境」の概念自体も検討を要する。

【参考文献】

- Appleton, Jay. 1975, *The Experience of Landscape*, London: John Wiley.
- Bakhtin, Mikhail Mikhailovich, 1986, *The Dialogical Imagination*, Texas: University Texas Press.
- Benediktsson, Karl and Katrín Anna Lund eds., 2010, *Conversations with Landscape*, London and New York: Routledge.
- Bender, Barbara and Margot Winer eds., 2001, *Contested Landscape: Movement, Exile and Place*, Oxford and New York: Berg.
- Berger, John, 1972, *Ways of Seeing*, London: Pelican Books/Penguin/BBC.
- Casey, Edward S., 2001, 'Between Geography and Philosophy: What does it mean to be in the Place-World?', *Annals of the Association of American Geography*, Vol.91, No.4, 683-93.
- Cosgrove, Daniel, 1984, *Social Formation and Symbolic Landscape*, London: Croom Helm.
- Cosgrove, Denis and Stephen Daniele eds., 1988, *The Iconography of Landscape*, Cambridge University Press. (= 2001年, 千田稔・内田忠賢監訳『風景の図像学』地人書房.)
- Council of Europe, 2000, *European Landscape Convention*.
- DeLue, Rachael Ziady and James Elkins eds., 2008,

- Landscape Theory*, New York and London: Routledge.
- Ingold, Tim, 1993, 'The Temporality of the Landscape', *World Archaeology*, Volume 25 (2), 152-174.
- , 2005, 'The eye of the storm: visual perception and the weather,' *Visual Studies*, Vol.20, No.2, Routledge, 97-104.
- , 2007a, "Against soundscape", in E. Carlyle (ed.), *Autumn Leaves: Sound and the Environment in Artistic Practice*. Paris, Double Entendre, 10-13.
- , 2007b, *Lines: A Brief History*, Routledge. (= 2014年, 工藤晋訳『ラインズ——線の文化史』左右社.)
- Inglis, Fred, 1977, 'Nation and Community: a Landscape and its Modality', *The Sociological Review*, 25 (3), 489-514.
- 和泉 浩, 2018, 「ティム・インゴルドの反サウンドスケープ論——音と光、サウンドスケープとランドスケープ」『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』第73集, 11-21.
- , 2019, 「サウンドスケープ概念の再検討——アリ・ケルマン, ステファン・ヘルムライヒらによるサウンドスケープの批判的検討について」『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学』第74集, 13-25.
- Meining, Donald William ed., 1979, *An Interpretation of Ordinary Landscape*, Oxford: Oxford University Press.
- Olwig, Kenneth R., 1996, 'Recovering the Substantive Nature of Landscape', *Annals of the Association of American Geographers*, 86(4), 630-53.
- Porteous, J.D., 1990. *Landscape of Mind: Worlds of Sense and Metaphor*, Toronto: Toronto University Press.
- Relph, Edward, 1987 [1981], *The Modern Urban Landscape*, Baltimore: John Hopkins University Press. (= 2013年、高野岳彦・神谷浩夫・岩瀬寛之訳『都市景観の20世紀』ちくま学芸文庫.)
- Rodaway, Paul, 1994, *Sensuous Geography: Body, Sense and Place*, Oxford: Routledge.
- Tuan, Yi-Fu, 1974, *Topophilia*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- , 1979, *Landscape of Fear*, Minneapolis: Minneapolis University Press.
- Williams, Raymond., 1973, *The City and Country*, London: Chatto&Windus.